



長野市立博物館
NAGANO CITY MUSEUM



博物館だより

Nagano City Museum

第125号

令和5年度春季企画展紹介

皆神山をとりまく世界～パワースポットの源流を探る～



皆神山遠景

長野市立博物館では、令和5年4月22日から6月18日まで、企画展「皆神山をとりまく世界～パワースポットの源流を探る～」を開催します。

長野市松代町に位置する皆神山は、標高659mという低山ながら、円錐形の独立峰として地域のシンボリックな存在です。現在は世界最大最古のピラミッドやUFO出現地などとして訪れる人が絶えない聖地となっています。このように神秘の山として知られる以前の皆神山にはどのような信仰世界があったのでしょうか。本稿では企画展に出品される作品を一部ご紹介するとともに展示の見どころをご案内します。

皆神山をとりまく神と仏 — 展示のみどころ紹介 —

皆神山には皆神神社があり、近代以前には皆神修験の本拠として重要な位置にありました。室町時代以降、川中島四郡（高井郡、水内郡、更級郡、埴科郡）だけでなく、諏訪・木曾・筑摩・安曇・伊那をも統括し、江戸時代には戸隠や飯縄を凌ぐ修験の一大拠点となったのです。

こうした皆神修験の形成には、当該地域の古くからの歴史を見る必要があります。文献上明らかな古代寺院としては、「清滝寺」があります。これは『吾妻鑑』に平家没官領（源平合戦によって平家が滅亡し、これによって朝廷に没収された所領、言い換えれば平家が所有していた所領）としてあげられている寺院です。清滝寺は現在の松代町東条に所在する清滝観音のことだと考えられています。清滝観音は平安時代には大きな伽藍を有する寺院であった可能性があります。そのためか、鎌倉時代に遡る

千手観音像が現在に伝わります。

また、延喜式内社に比定される玉依比売命神社があります。御田植神事や多くの勾玉を神宝として伝えていることで知られています。この神社には平安時代に遡る狛犬や古仏が伝わり、やはり古くからこの地に根差した信仰の姿をうかがうことができるのです。

中世に目を転じて、東光寺や源関神社、そして明德寺などにも仏像や古文書などが伝わり、中世に到っても仏教文化の隆盛していたことがうかがい知れます。

このように、皆神修験はその周辺に存在した平安時代以来の信仰をベースにしていたのです。

この展示では、皆神山を中心とした長野市松代町南東部の地域に伝わる、これまで知られていなかった古代・中世の名宝を一堂に紹介しています。この地域の歴史の奥深さに触れていただければと思います。（原田和彦）



清滝寺参道に立つ鎌倉時代の石幢（笠仏）と皆神山

主な展示品紹介

第一章 皆神山周辺の神と仏

皆神神社所蔵大日如来坐像の墨書銘に「信州埴科郡英田庄東条群神山」とあるように、皆（群）神山を含む周辺地域は古代には英田（多）庄と呼ばれ、現在の松代町東条地区や豊栄地区がその地域に当たります。ここでは主に両地区の社寺に伝わる平安時代から室町時代頃までの神仏像をご紹介します。

《銅造 阿弥陀如来坐像》

鎌倉時代 建久2年（1191）、個人（長野市松代町豊栄）蔵



正面・背面・像底

かつて皆神山内にあった万行寺に伝わった総高8.3cmの小仏。台座底面に、仏像では市内最古の紀年銘が陰刻されます。万行寺は皆神山和合院の同行（末寺）で、開院（初代）は宥良坊（永禄3年・1560没）です。

《狛犬》

平安時代 12世紀、玉依比売命神社（長野市松代町東条）蔵



吽形・阿形（大津市歴史博物館 寺島典人撮影）

阿形の頭頂部に柄穴があることから、本来は阿吽ともに角のある狛犬一対像であったことが分かります。近年の調査で初めて古像であることが判明しました。玉依比売命神社は延喜式神名帳に記載される古社として知られます。当社の神官小河原供秀が皆神山に入って社家から修験に転じ、皆神修験の祖となったとされます。

《棟札》（長野市指定有形文化財）

室町時代 応永12年（1405）、源関神社（長野市松代町豊栄）蔵



正面・部分
「明德寺」

源関神社は松代町から上田市真田町に通じる地蔵峠道の麓で関屋集落の中ほどに鎮座します。この道は古くから小県・佐久・上州に通じていた重要な交通路でした。当社は、古くこの地に土着した諏訪の神氏の一族である関屋氏が奉斎したと考えられています。この棟札により、応永12年に関屋市兵衛が本願主となり本殿が造立されたことがわかります。別当明德寺の名前も見えます。

《宇賀弁財天坐像》

室町時代 15世紀頃、東光寺（長野市松代町東条）蔵



宇賀神像底

東光寺は、初め蓮光寺と号し、保延元年（1135）村上義重の開山とされ、天文22年（1553）に武田信玄が海津城（現松代城）を築城した際城の祈願寺としたとされ

ます。宇賀弁財天は、蛇の体に老翁の頭をつけた宇賀神という異形の神を戴せ、福德性を増した弁財天です。宇賀神の像底に墨書があり「仏工 / 上田別所」等と読めます。

《宝冠釈迦如来坐像》

室町時代 応永12年（1405）、明真寺（長野市松代町東条）蔵



像底

通常の釈迦像は螺髪という小巻毛の頭部に表されますが、本像は髪を結び上げ宝冠をつけた珍しい姿です。像底の墨書銘（応永12年・1405）は明德寺から奉納された源関神社の棟札銘（応永12年）や、明德寺本尊（明德元年・1390頃、鎌倉時代とも）と同時期で、南北朝から室町時代頃の皆神山周辺の信仰世界の盛り上がりを今に伝えています。

《千手観音菩薩立像》

鎌倉時代 12 世紀頃、清滝観音堂（長野市松代町東条）蔵（甲区共同会管理）



清滝観音堂の秘仏。堂の創建は不明ですが『吾妻鑑』にみえる「清滝寺」の後身だと考えられています。堂から坂を下ったところに鎌倉時代の石幢（笠仏）があり、清滝寺の参道に立てられたものとされています。

第二章 皆神修験とその広がり

室町時代 16 世紀初め頃、玉依比売命神社の神官小河原供秀（祝家吉）が皆神山に修験を導入し始め、その子下野守三郎満頭が大日寺を継いでからは和合院と称し、後に侍従天狗坊を名乗り皆神修験の基礎を固めていきました。和合院は慶長 10 年（1605）に天台修験の本山派に加わり、そ

の後川中島四郡の年行事職（特定地域の山伏の支配権）、さらに木曾郡・筑摩郡・安曇郡・諏訪郡の先達職（檀那を各地の霊場参詣へ導く権利）を得て信濃の本山派修験として勢力を拡大しました。ここでは皆神神社に伝わる仏像や、皆神修験の広がりを示す資料を紹介します。

《大日如来坐像・阿弥陀如来坐像・弥勒菩薩坐像》（長野市指定有形文化財）

室町時代 永正 4 年（1507）、皆神神社（長野市松代町豊栄）蔵



大日如来



阿弥陀如来



弥勒菩薩

皆神山はなだらかな円錐形に 3 つの頂があり、それぞれ中ノ峰・東ノ峰・西ノ峰と呼ばれます。本像はそれぞれ三峰の本地仏として弥勒 2 年（弥勒は私年号。永正 4 年・1507 のこと）に祝家吉によって造られたことが分かります。

《十一面観音菩薩種字懸仏》

室町時代 永享 12 年 (1440)、山家神社 (上田市真田町長) 蔵



裏面・部分「願主家吉」

長野市松代町から地蔵峠道を抜けると上田市真田町に通じます。山家神社は四阿山に奥社を置く古社で、白山神を勧請したのは平安時代に遡るとされます。表面には四阿山の本地仏十一面観音の種字 (梵字) 「キャ」が陽刻されます。背面には「願主家吉」と陰刻され、大日如来坐像 (皆神神社蔵) の墨書銘「民部大夫家吉」と同名で、皆神山から地蔵峠を越えた周辺地域まで活動圏の広がりが想定されます。

《不動三尊像 (九頭龍権現)》

室町時代 15 ~ 16 世紀頃、見玉不動尊 (新潟県中魚沼郡津南町秋成見玉) 蔵



戸隠山無動寺から飯山徳法院に勧請されたもので戸隠九頭龍権現と伝わります。不動明王は珍しい片脚踏み下げで、足元には龍が横たわります。《寺社領並由緒目録 (天和の書上げ)》 (江戸時代 (原本天和 3 年・1683)、西敬寺 (飯山市飯山) 蔵) によると、徳法院は社家の「巫女旭」でしたが、戸隠修験に入り、その際戸隠無動寺から本像を勧請したと伝わります。その後皆神修験が支配地域を広げる中で和合院の配下に転じたとされます。本像は徳法院が廃寺となった後、同じ天台宗の見玉不動尊に移されました。

江戸時代、信濃の本山派修験における一大勢力となった皆神修験。勢力拡大には、本山派修験の全国的な組織化にうまく乗じたことや、海津城の歴代城主による崇敬、松代藩による庇護などの影響が大きいことは言うまでもありません。

その一方で、皆神山をとりまく平安から室町時代まで続く信仰世界の豊穡さを目の当たりにすれば、皆神修験が他にもない皆神山を拠点として活動を展開していったことは自然ななりゆきとして納得されるでしょう。現在はパワースポットとして有名な皆神山ですが、周辺地域も含めて見ると、古代から連綿と続く神仏の霊場として新たな魅力を感じていただければ幸いです。(竹下多美)

皆神山周辺に残された古文書

今回の展示では皆神神社をはじめ、周辺の寺院に伝わる古文書も展示しました。こうした史料からは、歴代領主たちからいかに崇敬を集めていたのか、当時どのような活動をしていたのかを具体的に知ることができます。ここでは代表的な展示品をいくつか取り上げ、その概要を紹介いたします。

《武田勝頼朱印状》(長野市指定有形文化財)
室町時代 天正 8 年 (1580)、東光寺 (長野市松代町東条) 蔵



松代町東条にある東光寺は、かつては蓮光寺と呼ばれ、武田信玄によって海津城が築城された際には、その鎮守として位置づけられたと伝わります。この史料は、信玄の子・勝頼が、相模国を拠点としていた戦国大名・北条家に対する戦勝祈願を蓮光寺住職・泉良に命じた朱印状です。この2年前に越後国の戦国大名・上杉謙信が亡くなり、その後継者争いである「御館の乱」が発生します。勝頼はそれまで敵対していた上杉景勝と同盟を結び、家督継承を支援しました。一方、北条家は親族である上杉景虎を後継者として支持していたため、それまで同盟関係にあった武田家と断交し、敵対関係になっていました。

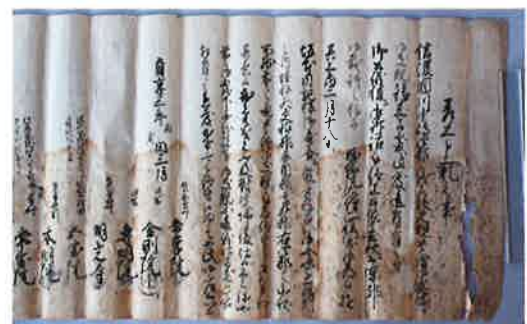
《田丸直昌安堵状》(長野市指定有形文化財)
江戸時代 慶長 4 年 (1599)、明德寺 (長野市松代町豊栄) 蔵



松代町豊栄にある明德寺は、武田家臣で海津城主だった高坂昌信が中興した古刹です。武田家が織田家によって滅ぼされた後、松代は上杉家の支配下となりましたが、慶長3年に上杉家が会津へ転封となると、替わって田丸直昌が入りました。この史料は明德寺の寺領をこれまでどおり認めるという内容ですが、明德寺にはその後に松代を治めた松平忠輝が発給した禁制や寄進状なども伝わっており、歴代城主によって手厚く保護されてきたことがうかがえます。

《奥筋山伏中霞下証文》

江戸時代 貞享 3 年 (1686)、皆神神社 (長野市松代町豊栄) 蔵



冒頭(部分)



末尾(部分)

修験道本山派の総本山・聖護院の院家である勝仙院から信濃国の年行事職に補任された皆神山和合院は、その力を背景に、周辺の山伏たちを霞下（支配下）に組み込んでいきました。しかし貞享3年、飯山の修験者たちは次第に影響力を強めようとする和合院に反発し、その支配からの離脱を求め、幕府へ訴えました。江戸の寺社奉行のもとで裁判が行われましたが、最終的には勝仙院に支援された和合院の主張が認められることになりました。敗訴した山伏たちのうち、裁判を主導した数名は、勝仙院のとりなしで一代に限り和合院の支配を脱することが認められたものの、それ以外の山伏たちはことごとく和合院の配下となることが決定されました。勝訴した和合院は、改めて領内の山伏たちから支配に異議のないことを誓わせた証文を提出させました。

《川中島四郡先達職補任状》

江戸時代 元和6年（1620）、皆神神社蔵



勝仙院が和合院に対して川中島四郡（北信地域一帯）における諸山参詣道者の先達職を与えたもの。先達とは、いわゆる旅行

ガイドのような存在で、富士山などの霊山を参詣する際の案内役でした。同様の補任状は諏訪・木曾・筑摩・安曇などの各郡についても残されています。こうした文書は和合院の山伏支配の正当性を示すもので、貞享3年の裁判でも証拠書類として利用されたものと思われま

《山伏法度》

江戸時代 明和6年（1769）、皆神神社蔵



冒頭(部分)

末尾(部分)

勝仙院から和合院へ出された山伏として守るべきルールを示した法度。支配下の山伏たちに対してその内容を通達するのも川中島四郡の年行事である和合院の役目でした。最初に署名しているのは「老僧」や「目付」などの有力山伏で、和合院からの命令はまず彼らを経由して、さらに末端の山伏たちへ通達されることになっていました。他にも、修験道にとって重要な入峰修行の調整や役銭の徴収といった年行事としての様々な役目がありました。それらに対応するため、皆神山には「役所」が設けられていたようで、信濃国内の山伏たちの組織化が進められていったことがうかがえます。（野村駿介）

博物館だより 第125号 発行日2023年3月31日

長野市立博物館

〒381-2212 長野市小島田町1414
TEL:026(284)9011
<http://www.city.nagano.jp/museum>

戸隠地質化石博物館

〒381-4104 長野市戸隠栃原3400
TEL:026(252)2228

鬼無里ふるさと資料館

〒381-4301 長野市鬼無里1659
TEL:026(256)3270

信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館

〒381-2404 長野市信州新町上条88-3
TEL:026(262)3500